商経アドバイス　令和 5 年 10 月 19 日（木）第 6284 号

日本海側と太平洋側で作柄明暗も
作況 100、収穫量 662 万ﾄﾝ
新潟 95、秋田 97「やや不良」

農水省は 13 日、9 月 25 日現在でみた令和 5 年産米の作柄概況を発表した。 全国作況指数 100 の「平年並み」を見込んでいる。北東日本を中心とする未曾有の猛暑やフェーン乾燥高温などの影響を受けた北～西日本の日本海側産地で不作が際立つ。対照的にフェーンの影響がなかった北・東日本の太平洋側などは 104～105 の豊作予測となった。全国猛暑でも明暗が分かれる中、豊凶が相殺される形で 5 年連続全国平年作が見込まれる。主食用予想収穫量は基本指針の 669 万ﾄﾝより 7 万ﾄﾝほど少ない約 662 万ﾄﾝに抑制される見通しとなった。

5年産水稲の主食用米生産動向 (9月25日現在、全国・農業地域別)

単位:面積ha、収量kg、収穫量t

	作付見込			作況	10a		予　想		
	面　　積	前年差	前年比	指数	収量	前年差	収穫量	前年差	前年比
全　国	1,242,000	▲9,000	▲0.7%	100	534	▲ 2	6,624,000	▲77,000	▲1.1%
北海道	82,200	▲ 300	▲0.4%	104	582	▲ 9	478,400	▲ 9,200	▲1.9%
東　北	309,200	+1,000	+0.3%	101	570	+11	1,761,000	+38,000	+2.2%
北　陸	174,000	+ 500	+0.3%	97	514	▲27	895,000	▲43,800	▲4.7%
関東・東山	227,500	+ 300	+0.1%	102	545	+ 7	1,242,000	+19,000	+1.6%
東　海	84,300	▲1,000	▲1.2%	99	498	▲ 6	419,600	▲10,300	▲2.4%
近　畿	91,200	▲1,600	▲1.7%	99	503	▲14	457,900	▲21,600	▲4.5%
中　国	90,900	▲1,900	▲2.0%	101	519	▲ 5	472,300	▲14,100	▲2.9%
四　国	42,700	▲1,300	▲3.0%	100	482	▲15	205,500	▲12,900	▲5.9%
九　州	139,500	▲4,900	▲3.4%	99	495	+ 1	690,900	▲22,300	▲3.1%
沖　縄	545	▲ 59	▲9.8%	99	307	▲ 6	1,670	▲ 150	▲8.2%

(注) 作況指数は、都道府県別の選別ふるい目幅 1. 80～1.90mm 基準 (2年産からの適用)で算定したもの。
10a 収量と予想収穫量は1.70mm 基準 (全国一律) を掲載。

9 月 25 日現在調査 宮城･栃木 105 予測

作況指数の基準となる農家使用ふるい目幅ベース(都道府県別に 1.80~1.90)に基づく 10 ｱｰﾙ予想収量は平年収量より 2 ｷﾛ多い 514 ｷﾛまた予想収穫量の基準となる全国一律の 1.70 収量は同 2 ｷﾛ少ない 534 ｷﾛ(前年比 2 ｷﾛ減)となった。主食用作付面積は引き続き減少しており、前年比 9000 ﾍｸﾀｰﾙ(0.7%)減の 124 万 2000 ﾍｸﾀｰﾙ。1.70 ﾐﾘ収量に作付面積を乗じた予想収穫量は 662 万 4000 ﾄﾝで、前年比 7 万 7000 トン減が見込まれる。

農業地域別では、8 月上旬から 9 月上旬にかけフェーンや少雨・渇水など苛酷な気象にさらされた北陸が作況の「やや不良」となり、唯一の不作地域に。逆に猛暑が増収に作用しやすい北海道 (104)

や、太平洋側の関東・東山(102)は「やや良」となった。東北は、日本海側不作を太平洋側豊作が補う形で 101「平年並み」を保っている。

都道府県別の作柄内訳は「やや良」13 道県、「平年並み」24 都府県、「やや不良」10 府県。全国最低指数は「やや不良」範囲の下限となる新潟・鳥取の 95 だった。新潟はフェーンを含む危険な猛暑に加え、5 月下旬の低温寡照も響いた。北陸では富山・福井も、また福井と隣接する滋賀も 97 の不作だった。鳥取は高温のほか 5~7 月の日照不足が影響した。いずれも日本海側産地だ。一方、全国最高指数は宮城・栃木で、「やや良」上限の 105。北海道・岩手が 104 で続いた。

東北最大の日本海側産地・秋田は 97。2 年連続の不作となった。秋田の JA 関係者は「一番の不作要因は異常なくらいのフェーン高温だろう。夜も暑くて気温の日較差が取れず、実が太れなかった。収量は 1~2 割少ない。 シラタ等も含めた未熟粒が多く、1 等比率は 6~7 割だが、5 割台まで下がる可能性もある。春先の低温で全籾数が少なかったことも影響した」と説明する。

県別の主食用予想収穫量をみると、最高作況 105 の宮城が前年比 1 万 8800 ﾄﾝ (6.1%)増、栃木が 1 万 7100 ﾄﾝ (7.0%)増。 太平洋側産地の豊作増産が浮かび上がる。一方、予想収穫量のマイナスをみると、新潟が前年比 2 万 8400 ﾄﾝ(5.2%)減で突出。以下、富山が 9300 ﾄﾝ(5.3%)減、昨年は大豊作だった北海道が 9200 ﾄﾝ(1.9%)減、滋賀 8800 ﾄﾝ(6.1%)減などと続く。

なお最高作況 105 となった宮城だが、県内の JA 関係者は「出穂までは最高の条件で、大豊作も期待できたが、8~9 月の度を過ぎた暑さが原因でそうはならなかった。収量は並み程度。人によっては『やや不良』で現場に豊作ムードはない」と話す。ただし 1 等比率は 8 割台を確保している。

また青森(102)の JA 関係者は、「収量は平年並みか少し落ちる程度。ただし 1 等比率は 5 割程度で、落等要因は高温による白未熟系が大半を占める。高温多照で遅れ穂の多くが網上にシフトしたが、籾嵩はあったのに籾殻が分厚くて中身が太れず、皮を剥くと小粒で目方がない。網上の玄米はやや減収、網下は 半減」と説明する。

来年 6 月在庫縮減 180 万ﾄﾝ割る

令和5/6年の需給見通(万t)

	基本指針	9/25現在
5年6月末民間在庫量	197	197
5年産主食用米等生産量	669	662
5/6年主食用米等供給量計	866	859
5/6年主食用米等需要量	681	681
5年6月末民間在庫量	184	178

農水省が示した 5 年 6 月末の民間在庫量 197 万ﾄﾝに予想収穫量 662 万ﾄﾝを足すと、5 年 7 月/6 年 6 月総供給量は 859 万ﾄﾝ 5/6 年需要見通し 681 万ﾄﾝを差し引くと、来年 6 月末在庫見込みは 178 万ﾄﾝ。19 万ﾄﾝの在庫縮減が進む計算だ。6 月末在庫が需給均衡水準 200 万ﾄﾝを大きく切り、180 万ﾄﾝ水準まで減少するのは東日本大震災の影響があった平成 24 年以来 11 年ぶり。 180 万を割るのは 16 年ぶりとなる。

平年作見通しの中、かつてない高温障害多発による「1 等米不作」の様相と高温減収の度合い、西日本晩生作柄の行方、ふるい下発生激減の影響、外食需要復活と絶対量不足の懸念、米価上昇による需要減などが焦点となりそうだ。